関西大学心理臨床センター紀要，7，85～88，2016

A 市における「夏休み親子教室」の実施に関して

一般社団法人リージョナルネット　顯谷美也子
関西大学臨床心理専門職大学院　石田　陽彦

要約

A 市では、学校生活において何らかの困難を有する子どもとその保護者を対象とした親子教室を毎年実施している。本稿では全 3 回の教室の様子を報告するとともに、子どもたちの関係性の形成や自己効力感・自尊心の育みについて考察する。本事業も今年で 3 年目となることもあり、前年度までの子どもたちとの関係性を基盤とした関わりが可能となった。またフリータイムでは子どもたちが他児やスタッフと伸び伸びと遊ぶ姿が見受けられたことからも、本教室を安全な場だと子どもたちが認識し、自らの主体性を発揮してスタッフや他児との関係性を育んでいったことが考えられた。

キーワード：発達障害、自己効力感、関係性

Ⅰ. はじめに

児童期の発達課題は勤勉性と劣等感であると言われており、この時期を乗り越えることによって子どもたちは有能感を獲得すると考えられている。児童期に認められる劣等感は、対人感情の芽生えや確かな自己評価の産物であり、決してマイナスとして捉えられるものではない。しかしその劣等感情の占める割合があまりにも大きくなってしまった場合には、否定的な自己感情が高まり、自尊心・自己効力感の低下につながっていく。発達障害児と自尊心・自己効力感の関係については、現在も様々な議論がなされている。発達障害やその他様々な障害により学習面やコミュニケーション面で困難が生じている子どもの場合、対人面の困難さや周囲の理解不足などから、自尊心・自己効力感の育みが難しくなる可能性があるのではないかと筆者は考える。

また川上（2012）は、発達障害児における問題発生の要因について、「ほどよい関係体験」がきちんと味わえていないことが挙げられるとしている。ここでいう「ほどよい関係体験」とは、積極的で濃密なふれあいを積み重ねる中で、やがてお互いが直接つながっていなくてもお互いを思いやり合うことができる関係性に到達することを意味している。さらに川上（2012）は、直接的な人間と人間の接触を通して受け止められる関係性の体験感覚が子どもに取り込まれていってはじめて、子ども自身を一つの丸ごとの存在として包み込む「外膜」が出来上がっていく、とも述べており、発達障害児における他者との関係性の構築の重要性を主張している。

本事業では、ゲームや自由遊びなどを通してスタッフと子どもたちが交流することによって「ほどよい関係性」を形成し、その中で子どもたちの自己効力感や自尊心が育まれていくことを目的としている。本稿では、2015 年度に A 市で実施された親子教室の活動を報告する。

Ⅱ．概要

目的：安全で安心できる環境の中、子どもたちがスタッフや他児との交流を経験することにより、自信や社会性の向上を図ること。
日程：全３回、各２時間の教室を行う。
対象：A 市内の幼稚園や小学校に通う、支援を必要とする園児または児童及びそのきょうだいを対象とした。

Ⅲ．教室の様子

以下に、全３回の親子教室の様子を記す。

#1
目的：他児・スタッフとの関係づくり
参加者：12 人
スタッフ：7 人
13：00 ～　子ども到着
13：15 ～　あいさつ、名前呼び
13：20 ～　新聞びりびり
保護者も参加した。新聞を自由に破いて遊ぶ。自由度の高い遊びであるため、子どもたちの緊張を緩和することができると考える。
13：40 ～　サーキット（忍者修行）
ブルーシートくぐり、吹き矢、しゅりけん取りなどの障害物を乗り越えて、ゴールを目指す。子どもたちがプログラムに意識を向けやすくなるよう、“忍者修行”というテーマのもとすべての障害を設定した。
14：10 ～　ビニール傘玉入れ
逆向きにしたビニール傘に、玉を投げ入れる。
14：30 ～　フラフープリレー
全員で手を繋いで輪になり、順番にフラフープをくぐっていく。
14：45 ～　フリータイム
15：00　あいさつ、解散

#1 を振り返って
前年度から引き続き参加している子どもも多いため、#1 では、再会の喜びを分かち合うこと、遊びを通して相手との関係性を想起することに重点を置いてプログラムを進行していった。1 年ぶりの他児やスタッフとの再会に最初は緊張していた子どもも、新聞びりびりで目一杯体を動かすことで、少しずつ緊張がほぐれていった。フラフープリレーでは、試行錯誤しながらフラフープをくぐる他児の姿を見て、自然と周囲から「頑張れ」「あと少し」などの声掛けがあがった。自分だけの世界に入り込むのではなく、それぞれの子どもたちが他児の行動や表情にしっかりと意識を向けていたためであると考えられる。

また衝動性のコントロールが苦手で集団の輪から出てしまいがちな子どもに対しては、スタッフが一対一で付き添い、気持ちの高ぶりをしっかりと言葉で伝え返すことを意識して関わっていった。無理に集団に戻すのではなく、子どものペースを守りながら、スタッフが余裕を持った姿勢を見せることにより、子どもも安心してクールダウンすることが可能となった。

#2
目的：他児との交流
参加者：14 人
スタッフ：8 人
13：00 ～　子ども到着
13：15 ～　あいさつ、名前呼び
13：20 ～　じゃんけん列車
保護者も参加した。他児、スタッフ、保護者など様々な人とじゃんけんを通して交流を図る。
13：40 ～　お絵かき
1 枚の大きな模造紙に、手や足を使って思い思いの絵を描く。
14：10 ～　マラカス作り、演奏
カップで作ったマラカスに装飾を施し、リズム遊びを行う。
14：40 ～　フリータイム
15：00　あいさつ、解散

#2 を振り返って

#2 では、製作を中心としたプログラム構成を行った。中でもお絵かきでは 5m ほどの模造紙をキャンパスとして使用しており、日常ではなかなか経験することのない体験に子どもたちのモチベーションも高まっていた。感覚過敏を持つ子どもたちは最初は手や足にインクをつけることを躊躇っていたが、他児が楽しそうに遊ぶ様子を見て自分もやってみようという気持ちになれたようである。また、数に限りがあるインクやペンの使用に際しては、自然と子どもたち同士の譲り合いの場面も見受けられた。さらに #2 では、途中で子どもたちからクイズの出題をしたいという要望があり、子どもが自由な発想で主体的に親子教室を作り上げていることを実感した。

他児と上手くコミュニケーションを取ることが難しい子に対してはスタッフが間に入り、お互いの意思疎通のサポートを行った。また製作における個人の進行速度も様々であったが、様子を見ながら目安となる終了時間を明確に示すことで子どもたちの見通しが立てられるように配慮した。

#3

目的：子ども自身の遊びの展開

参加者：15 人

スタッフ：8 人

13：00 ～　子ども到着

13：10 ～　あいさつ、名前呼び

13：15 ～　風船バレー

保護者も参加した。4 つのグループに分かれて円になり手をつなぐ。指定された時間風船を落とさないようにパスし続ける。

13：35 ～　ものまねゲーム

みんなで円になり、円の中央にいるリーダーと同じ行動をする。

13：50 ～　水鉄砲作り、水遊び

ペットボトルに絵を描いて子どもたち一人ひとりがオリジナルの水鉄砲を作製する。その後その水鉄砲を使い、屋外で的当てなどの水遊びを行う。

14：40 ～　フリータイム

15：00　あいさつ、解散

#3 を振り返って

#3 では、比較的自由度の高い水遊びをメインのプログラムとして導入した。水鉄砲づくりでは、ペットボトルの使い方やストローをつける位置などひとつひとつ試行錯誤しながら製作を進めており、子どもたちの創造性が遺憾なく発揮された。スタッフはその豊かなアイデアにしっかりと丁寧にフィードバックを返し、子どもたちの中に成功体験が残るよう心掛けた。

また #3 では子どもたちが主体的に遊びを展開させていくことができるようにフリータイムを多く取ったが、フリータイムの中では、スタッフを介して子どもたちが何人か集まって遊ぶ場面が多く見られ、子ども同士の関係性の深まりを感じることができた。回を重ねるにつれて子どもたちが「〇〇ちゃんがまだ来てない」「〇〇くんは？」など、お互いの名前を呼び合う場面も多くみられるようになった。

Ⅲ．総括

本事業の特徴のひとつとして、子どもたちの様子に合わせてプログラムを柔軟に変更するという点が挙げられる。今年度の親子教室においても、プログラムに合わせて子どもを動かすのではなく、子ども一人ひとりのペースや興味関心に目を向けながら、プログラムの方を子どもに合わせて柔軟に変更していくという姿勢を心掛けた。こういった姿勢を取ることにより、子どもたちの中に親子教室という場に対する安心感や自由感が芽生え、結果として子どもたちが主体的に親子教室という場を作り上げていくことに繋がったのではないだろうか。また、今年度はフリータイムを多く取り、前年度以上に子どもたちが自由に遊びを展開させていく機会を

増やした。本事業が始まったばかりの頃は、子どもたちは何をしても良い“自由な時間”というものが苦手であり、フリータイムでも遊ばずにじっと座っていることが多かった。しかし今では、フリータイムを目一杯使い、笑顔で走り回る子どもたちの姿が非常に多く見られる。これも、スタッフや他児と関係性を深める中で、それぞれの子どもたちの中にしっかりと親子教室という場所が根付いたためであると考えられる。

今年度の親子教室は、幼稚園児の人数が増え、例年よりも学年の幅が大きいものとなった。そういった中で、様々な年齢層の子どもが楽しめるよう、複雑なルールは避け、なるべく単純で分かりやすい内容のプログラム構成を意識した。中でも #2 のお絵かきでは、子どもたち全員の意識がキャンパスに向いており、場の一体感を感じることができた。描く、走る、ちぎる、などの単純かつ衝動性を発散できるようなプログラムが、子どもたちにはフィットしていたようである。

また前年度から引き続き今年度も、親子教室の象徴として新聞プールを導入した。#1 の最初に子どもたちみんなで遊んだ新聞紙を #3 の最終回まで教室の中に置いておくことで、子どもたちの中に、前回からの繋がりを作ることを意図した。集団に入ることが難しい子も、新聞プールという落ち着く環境の中でじっくりとスタッフと関わることによって緊張が少しずつほぐれていったようであった。“新聞をかける”“新聞で埋める”というような新聞を介した子どもたち同士の関わりが、新聞プールの中では自然と起こっていた。子どもたち同士の出会いの場、関わりの場として、新聞プールは大きな意味を持っていたようであった。

本事業も今年度で３年目を迎え、子どもたちの成長を継続的な視点からながめることが可能となっている。またこの親子教室は、わが子に対する同じような悩みを持つ保護者の話し合いの場としても機能しており、地域の中での相互のつながりを深めている。来年度以降も、子どもたちや保護者同士の“つながりの場”として本事業が継続していくことを期待する。

引用・参考文献

小口忠彦（1983）人間の発達過程――ライフ・サイクルの心理，明治図書出版株式会社.

川上範夫（2012）ウィニコットがひらく豊かな心理臨床――「ほどよい関係性」に基づく実践体験論，明石書房.